九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 『日本霊異記』の序・再考 : 来迎院本本文による検討と試読

崎村, 弘文
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/16312

出版情報：文獻探究. 2, pp.31-41, 1978-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

# 『日本霊異記』の序・再考

## ――来迎院本本文による検討と試読――

崎村弘文

本稿において筆者は、来迎院本『日本霊異記』の本文に拠って『霊異記』中・下巻の本文を再検討し、新たに妥当と思われるかたちを求めてみたい。その上で筆者なりの訓読文を提示し、いくつかの問題点について考察を加えたいと思う。既に、中田祝夫博士・八木毅氏等が同様の試みを行なわれていることでもあり、改めてこうした試みをなすことの意味が問われようが、筆者としてはなお考えたい点も有り、浅学非才を省みず、あえて筆を進めた次第である。諸賢の御批正を賜われば幸いである。

一

『日本霊異記』三序の本文と訓釈については、(1)諸本の間で残存の度合いにバラつきが有る、(2)文句が錯乱して〈殆んどその文意を解することができない〉部分も存する、等々、いくつかの大きな問題が有って、長い間論議が闘わされてきた。その後、遠藤嘉基博士・春日和男博士の研究が公にされ、さらに、中田祝夫博士・八木毅氏・小泉道氏・迫野虔徳氏等が次々に論考を示されるなどして、それらの問題に解決の道が与えられた。それ以後、改めて問題とすべき点も無きかに思われたのであった。

しかし、そのさなか、昭和四十七、八年に文化庁が行なった来迎院如来蔵聖教文書類調査に際して、新たな古写本が発見され、来迎院本と名づけられて、学界にも報告された(1)。周知の通りである。そして、調査が進むとともに、新出の同本は、〈興福寺本に次ぐ平安時代後期初めの古鈔本であって、中・下巻の現存最古写本であること〉が明らかにされ、〈中・下巻ともその序文をほぼ完存し、中巻の序は従前の欠失部分を補ってそのおよその全文を明らかにし、下巻の序の出現は従来前田家本をめぐって行なわれていた偽作説を完全に否定し〉得るものであることも明らかとなった

(2)。即ち、これによって従来の諸説を再検討し、本文およびその訓読についても新たな案を提出する余地がうまれたわけであり、さらに詳しい調査・研究が待たれることとなったのである。

来迎院本は傷みがひどく、文化庁による修理が行なわれ、しばらく自由な閲覧が許されない状況に有った。そのため、右の報告の後、実際にこれを調査して研究に利用されたのは、管見のとどくかぎりでは、遠藤嘉基博士おひとりのようである。中・下巻の序については、中田祝夫博士・八木毅氏がそれぞれの御立場から説を述べておられるが、それは右の報告を基とするものであった(3)。

修理の後も、来迎院本は自由に閲覧することができない状況に置かれているため(4)、複製の早期刊行が望まれたのであるが、このたび、日本古典文学会を通じてそれが実現された。本稿における考察は、すべてこの複製を基としている。

## 二

まず、来迎院本『日本霊異記』中・下巻序の本文を示す。

(1) 中巻序

イオ

「□
竊□代自寅(マヽ)化天皇以往隨外道馮卜者
自欽明天皇也後敬三寶信正敎然或皇。燒
臣寺流佛像或皇臣建寺弘佛法之中勝寶
應眞聖武大上天皇尤造大佛長紹法種剃
髮著袈裟受戒修善以正治民慈及動植舟
千古得一撫運居上三君由此福德飛空之
蜜咋芝草葺寺走地之蟻搆金沙建塔法幢高
竪而幡足飈八方慧船輕汎而。影扇九天瑞應
之華競而開國邑善惡之報現而示吉凶故号
稱勝寶應眞聖武大上天皇焉唯以是天皇代
所□惡□多數者由聖皇德顯事最多漏
事□今隨所聞□載耳覆搜惟忖心途易
□」

イウ

2オ　　2ウ　　3オ

富□

之者鐵杖加身好善之者金珠裝鉢譬如□
之向依牽之避斥加也損減除也滿益流頭
食糠米明捨寶許由繞耳巢父引牛豈異此
意懲還三界如車輪生迴六道似蓊移此死彼生
具受万苦惡因連轡趍苦處善業攀緣引安
堺賴頤慈而勝前德賢由生愛以頂上〻棲
羽孟嘗之七善曾參之三異善蓋斯意之矣
然景戒稟性不聰談口不利神遲鈍同於鎬
刀連居字華幡養競同於刻船編造文乱句
不勝貪善之至拙黷淨紙謬注口傳勝媿□
慮顏□耳熱庶□拾文者愧天慙人忍忘
帝□心之師莫□心爲藉此□右脇福□

1オ　　1ウ　　2オ

(2)下巻序

□記下□樂□

夫善惡因果□吉凶得失載諸外今
探是賢劫釋迦一代教分有三時一正法五
百年二像法千年三末法万法年自佛炎以
來迄于延暦六歳次丁卯而逕一千七百廿
二年過正像二而□末法然日本從佛法傳
始適以還迄于延暦六年而逕二百卅六歳
也夫華唉无聲鷄鳴无涙口觀代修善之者
若石岑花作惡□者似土山无匪磉因果作
罪以比毛目之人履巨失之贅尾其嗜名
利殺生疑詑鬼之人抱毒虵莫朽之号惡種
巨□之号善根惡報遄來如水鏡向之卽現
幸□颱号惡□如谷響喚之□
生
□孰常恃之既入末□

3オ　　2ウ

噫□側那□劫災唯資施衆僧一搏食於
修□之福而不逢當來飢饉之災賴持一
日不殺戒於行道之力而不値末劫刀兵之
怨昔有一比丘住山坐禪毎齋食時拆飯施
烏〻常啄効毎日□候比丘齋食訖後嚼楊
枝嚼口洒手把礫而烏居雜外時彼比丘不
瞪居烏投礫中烏〻頭破死即死生猪〻住
其山彼猪至於比□室上頽石求食石径下
中比丘而死猪不思石自來殺无記作罪无
記報怨何況乎發惡心殺无彼怨報与殖惡
之因怨之果是吾迷心作於福因而鑒芋
是□懐□僧景□所學者未得天台□
□人□
□者矣匪傳燈□
強訂瞪斯事尅轍淨刹奔心覺路遠足遵□
庶掃地共生西方極樂傾巣同住天上寶堂
者矣」

※□の部分は、傷みがひどく、判読しがたいところである。欽の如く、その部分に文字が有る場合は、残画によって補読したことを示す。

仮名傍訓は、原文に見えるかたちを、なるべくそのままに示した。原文には、仮名傍訓のほか、返点・二合点なども見えるが、煩雑となるのを避けるため、省略した。

なお、日本古典文学会複製の付録「来迎院蔵日本霊異記解題」には、山本信吉氏による翻字が示されているが、ここでは新たに複製に基づいて翻字を行なった。両者間に相違が有る場合、それはこの事情によるものである。

『日本霊異記』の序文は、次の表に示す如く諸本に存する。もっとも、同じく「存する」とは言っても、その度合いが諸本により様々であること、先に述べた通りである。そこで、右に示した来迎院本の序本文と他本の序本文とを対校した場合、以下のようなことが明らかになる。即ち、

(イ)既に指摘されていることであるが、来迎院本中巻序の本文は、諸本の中で最も残存度が高い。

(ロ)来迎院本下巻序の本文は、へまるで支離滅裂で、殆んどその文意を解することができない〉他本の錯簡を正すのに、有力な手がかりを与えるものである。

この事実に基づき、次に訓読文を示すに当っては、来迎院本を底本として対校を行なった。

| | 上巻 | | 中巻 | | 下巻 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 序の本文 | 説話本文 | 序の本文 | 説話本文 | 序の本文 | 説話本文 |
| 興福寺本 | ○ | ○ | | | | |
| 真福寺本 | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 前田家本 | | | | | ○ | ○ |
| 三昧院本 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| 来迎院本 | | | ○ | ○ | ○ | ○ |

※三昧院本は、その摹本系統の最善本とされる国立国会図書館本をはじめ、同系の諸本すべてに同一の錯巻が有り、中巻序に当たる部分が上巻説話の末尾（三十一縁）に錯入している(5)。

この表で、三昧院本中巻序本文とするのは、それを指す。

三

〔訓読文〕

(イ)中巻序

「竊(ひそか)(に)歴(たる)代(みよ)を承(るに)宣化天皇(より)〔自〕以往(さき)(は)外道(に)隨(ひて)卜者(に)憑(たの)(みたまへり)。欽明天皇(より)〔自〕〔也〕後(は)三寶(を)敬(ひて)正教(を)信(したまへり)。然(れども)或(るいは)皇臣(にして)寺(を)燒(き)佛像(を)流(せり)。或(るいは)皇臣(にして)寺(を)建テ佛法(を)弘(めたり)。之(か)中(に)勝寶應眞聖武大上天皇(は)尤(すぐ)(れて)大佛(を)造(り)長(ヒミシク)(に)法種(を)紹キ頭髮(かみ)(を)剃リ袈裟(を)著(き)戒(を)受(け)善(を)修(し)正(を)以(ちて)民(を)治(めたまひき)。慈(うつくしび)(は)動植(に)及(ひて)德(は)千古(に)秀(れたまへり)。一(を)得(て)運(を)撫ツル二

三靈(に)居上(りたまへり)。此(の)福德(に)由(りて)空飛(ぶ)[之]螫(も)芝草(を)咋(ひて)寺(を)葺(けり)。地(を)走(る)[之]蟻(も)金沙(を)構(へて)塔(を)建(てたり)。法幢(は)高(く)竪(チて)[而]幡足(は)八方(に)飜(メ(けり)。慧船(は)輕(く)汎(ひて)[而]帆影(は)九天(に)扇ケ(り)。瑞應(の)[之]華(は)繞(ひて)[而]國邑(に)開(けり)。善惡(の)報(は)現(にして)[而]吉凶(を)示(せり)。故号(を)勝寶應と具聖武大上天皇(と)稱(めたてまつる)[焉]。唯(し)以(れは)是(の)天皇(の)代(に)錄(す)所(の)善惡(の表(は)多數(なりといへり)[者]。聖皇(の)德(に)由(りて)顯(らかなる)事最(も)多(し)。漏(らせる)事[雖多]今聞(く)所(に)隨(ひて)[且]載(せ)且(つは)覆(す)。心(に)搜リ惟忖ル(に)途易[　　]富[　　][之]者(は)鐵杖(を)身(に)加(へらる)。善(を)好(む)[之]者(は)金珠(を)鉢(に)裝(る)。譬如(へは)[押][之]向(かひ)依(リ)索ケ(は)[之]避(け)斥(き)加(ふれは)[也]損減(し)除(けは)[也]滿(ち)益(るかことし)。流頭(の)糠(を)食(ひ)米明(の)寶(を)捨(て)許由(の)耳(を)繞(み)巢父(の)牛(を)引(くこと)豈此(の)意(に)異(ならむや)[歟]。三界(を)還(ること)車輪(の)如(く)生(きなから)六道(を)迴(ること)井(の)移(るに)似(たり)。此(に)死(に)彼(に)生(まれて)具(に)万苦(を)受(く)。惡因(は)轡(を)連(ねて)苦(しき)處(に)赴ル。善業(は)緣(を)攀チ(て)安(き)界(に)引(く)。頭キ慈(に)賴(りて)[而]膝(の)前(に)齎(を)懷(け)生愛(に)由(り

て)[以]頂(の)上(に)羽(を)棲(ましむ)。孟嘗(の)[之]七善(と)魚昔恭(の)[之]三異(とは)蓋(し)斯(の)意(ならむ)[之矣]。然(るに)景戒性(を)稟クル(こと)聰(くもあらす)[不]口(に)談(らふこと)利(くもあらす)[不]。神(の)遲鈍(なること)鐺(の)刀(に)[於]同(し)。字(を)連(ね)居(るては)華シク(もあらす)[不]。情(の)惷戇(なること)船(を)刻(みしに)[於]同(し)。文(を)編ミ造(りては)句(を)乱(る)。善(に)貪(る)[之]至(りに)勝(へす)[不]拙ク(して)浮(き)紙(を)黷シ謬チ(て)口傳(を)注(せり)。媿(つるに)勝(へ)虐(に)恭(く)顔酡リシ耳熱(し)。庶(はくは)拾文(を)覩ル者天(に)愧(ち)人(に)慙(ち)忍(ひて)事(を)忘(れ)心(の)[之]師(と)作(して)心(を)師(と)爲(る)莫(かれ)。此(の)功德(に)藉(りて)右(の)脇(に)福德(の)[之]翻(を)著(けて)[而]沖虛(の)[之]表(に)翔(けり)左(の)脇(に)智惠(の)[之]炬(を)燭(して)[而]佛性(の)頂(に)[於]登(り)普(く)群生(に)施(して)共(に)佛道(を)成(せむ)[也]」。

※訓読文の様式は、訓点資料の通例に準じた。左傍に×印を施した文字は、対校により来迎院本の文字を改めたものである。また、片仮名書きの部分は、来迎院本の仮名傍訓を活かしてみたものである(来迎院本の仮名傍訓は、動詞・形容詞等を終止形で示すことが多いが、ここでは、文脈により適宜活用形を変えて用いた)。濁点は省略した。以下、同様。

(2)下巻序

「夫(れ)善惡(の)因果(は)[者]内經(に)[於]著(はれ)吉凶(の)得失ハ外典(に)[諸]載(せ)タリ。今是(の)賢劫(の)釋迦一代(の)教文(を)探(るに)三(つの)時有(リ)。一(つに)ハ正法五百年二(つに)ハ

像法千年三(つに)ハ末法万年(なり)。佛(の)涅槃(したまひしよ)リ[自]以來延暦六年歳(の)次(リ)丁卯(に)[于]迄ルマテ[而]一千七百廿二年(を)逕(たり)。正像ノ二(つを)過(き)テ[而]末法ニ入(れり)。然(して)日本(に)佛法(の)傳(はり)始適テ(より)[從]以還延暦六年(に)[于]迄(るまて)[而]三百卅六歳(を)逕(たり)[也]。夫(れ)華(は)咲(みて)聲无(く)鷄(は)鳴(きて)涙无シ。代(を)觀(るに)善(を)修(する)[之]者ハ石ノ峯(の)花(の)若シ。惡(を)作(す)[之]者ハ土山(の)毛ニ似タリ。因果(を)礒(はす)[匪](して)罪(を)作(すは)[以]目无(き)[之]人(の)贇(の)尾(を)履(むか)比(し)。名利(を)甘ヒ嗜ミ(て)生(を)殺(すは)鬼(に)託(へる)[之]人(の)毒(ある)蛇(を)抱(くか)疑(し)。朽(つること)莫(き)[之]号(は)惡種(なり)。失(なはれさる)[匝][之]号(は)善根(なり)。惡報(の)崙(やかに)來(ること)水(の)鏡(の)如(し)。之(に)向(かへは)即(ち)現(す)。夸力(の)厩(く)被(ふこと)谷(の)響(きの)如(し)。之(を)喚(へは)必(す)應(す)。現報之(くの)若(し)。人慎(まさら)[不](むや)[乎]。此(の)生空(しく)過(きなは)後悔(ゆとも)益無(からむ)。暫尒(の)身詎(か)肩(へて)之(を)存(へむ)。泛尒(なる)命孰(か)常(に)之(を)恃(まむ)。既(に)末劫(に)入(りぬ)。何(そ)仂(めさら)[弗](む)[矣]。噫矜(れ)惻(む)。那(か)劫災(を)免(れむ)。唯(し)衆僧(に)一摶(の)食(を)資施(するときには)善(を)修(する)福(に)[於](して)[而]來(るへき)[當]飢饉(の)[之]災(ひに)逢(はさら)[不](む)。苦(みて)一日不殺(の)戒(を)持(するを)賴(とするときには)道(を)行(なふ)力(に)[於](して)[而]末劫刀

兵(の)[之]怨(に)値(はさら)[不](む)。昔一(りの)比丘有(りき)。山(に)住(みて)坐禪(しき)。齋食(の)時毎(に)飯(を)析チテ烏(に)施(しき)。烏常(に)啄ミ効ヒテ日毎(に)來(り)候テフ。比丘齋食訖(はりて)後楊子ヲ嚼ミテ口(を)嬾キ手ヲ洒ヒテ礫ヲ把(り)テ[而]翫(ふ)。烏籬(の)外(に)居(り)。時(に)彼(の)比丘居(る)烏(を)瞪ス[不](して)礫ヲ投(くるに)烏ニ中(りき)。烏(の)頭破(れ)飛(ひ)テ即チ死(にて)猪(に)生(まる)。猪其ノ山ニ住(む)。彼(の)猪比丘(の)室(の)上ニ[於]至(りて)石ヲ頹シ(て)食ヲ求(るに)石侄リ下(ち)テ比丘(に)中リテ[而]死(にき)。猪賊(せむと)思(はね)[不](とも)石自(ら)來(り)殺(す)。无記(にして)罪(を)作(せは)无記(にして)怨(を)報(ゆ)。何(に)況(や)[平]惡心(を)發(して)殺(すときには)彼(の)怨報无(きことあらむや)[歟]。殖惡(の)[之]因(と)報怨(の)[之]果(とは)是(れ)我(か)寤(れる)懐(なり)。羊僧景戒學(ふる)所(は)[者]天台智者(の)[之]問術(を)得(す)[末]。悟(る)所(は)[者]神人辨者(の)[之]答術(を)得(す)[末]。是(れ)猶(し)螺(を)以(ちて)海(を)酌(み)管(に)因(りて)天(を)闚(るかことし)[者矣]。傳燈(の)良匠(に)匪(すして)[而]強(ひて)訂斯(の)事(を)睠(る)。轍(を)淨刹(に)赴(き)心(を)覺路(を)莽(す)。遠(く)前非(を)愧(ち)長(に)後喜(を)祈(ふ)。奇異(しき)事(を)注(して)言(きて)提(ふる)流(に)示(す)。千(を)授(けて)勸(めむと)欲(ひ)足(を)濡(きて)導(かむと)欲(ふ)。庶(はくは)地(を)掃(ひ)テ共(に)西方(の)極樂(に)生(まれ)巣ヲ傾(けて)同(しく)天上(の)寶堂(に)住(まむとい)(り)[者矣]。」

※なお、対校によっても妥当と思われるかたちが見出だせぬ場合は、文脈にしたがって本文を改めた。

## 四

さて、以上二・三において、来迎院本の本文、およびそれを活かした訓読文を示したわけであるが、ここで、問題とすべきいくつかの点について触れておきたいと思う。

まず、中巻の序で問題とすべきは、翻字一丁裏五行目あたりから二丁裏二行目あたりまでの部分であろう。そのほかの部分については、従来読まれている通りでさしつかえないものと思われる。当該部分は、四字一句のかたちが連続し、〈仏典の語法の影響〉著しいと思われる部分である(6)。したがって、訓読も、それを反映するかたちで行なうべきものと思われるが、その場合、「流頭……引牛」の箇所が大変問題となる。「許由」「巢父」は、ともに中国の伝説中に見える人名であり、「流頭」「米明」についても、同様に人名と見るのが妥当かと思われる。しかし、残念なことに、いまのところ、それを確認する術が無い。前後の文脈(「押しやれば却って向かって来、ひっぱれば却って逃げて行く。増やそうとすれば却って減り、減らそうとすれば却って増える。」―「悪業を作して(名利を貪ろうとすると、却って)悪い結果を得て苦しみ、善業を作して(他者に施していれば、却って、名利にも代えがたい)安楽を得ることができる。」)からすれば、おそらくそのように見てさしつかえないはずである。なお、調査を試みたい。また、一丁裏七行目から二丁表一丁目にかけての不明箇所について付言すれば、少なくともその後半部には、右に示した譬喩がかたちを変えて示されていたはずである。「善を好む者は(名利を貪る気持ちが無いのに、却って名利が与えられて)金珠で鉢を飾ることになる。」というのであるから、その前の部分には、「悪を作す者は……」と有ってしかるべきであり、さらにその前にも同じような両様の譬喩が置かれていたものと思われる(以下の二文が四項の句から成っていること、参照)。

次に、下巻の序で問題とすべきは、第一に、その前半部に見えるへまるで支離滅裂で、殆んどその文意を解することができない〉錯簡である。この錯簡箇所は、来迎院本の現われる以前には前田家本のみに見られたもので、従来、それをもとに何とか読み通そうとする試みが行なわれていた(7)。その結果、比較的自然に文意が通るところまで錯簡が正され、訓読文が示されてはいたが、今改めて、来

迎院本により検討してみると、はるかに支障の無いかたちを得ることができる。この点では、来迎院本の価値は絶大である。九州大学大学院では、昭和五十二年十一月から五十三年二月の演習において、来迎院本『日本霊異記』が取りあげられたが、当該箇所を僚友秋吉望君が担当され、見事に読み解かれた。筆者は、同君の案に対し、細かい訓法の相違以外、何ら変更の要なきものと考える。したがって、ここには、同君の厚諾を得て、細かい点を修正し、その読を示すものである(8)。なお、同君の説を補強するために、次のような考えを示し得るのではないかと思う。即ち、

「巨失之」「号惡種」の句が各々二箇所に見え(1ウ3・1ウ5、1ウ4・1ウ6)、そのうち一箇所がいずれも錯簡を成していることから見て、聊か突飛な推測ではあるが、次のような誤写の契機が有ったとは考えられないか?、と。

> 匪禮因果作罪以比无目之人履贅尾甘嗜名利殺生疑詫鬼之人抱毒蛇莫朽之号惡種巨失之号善根惡報遍來如水鏡向之即現今力殿被如谷響喚之必應……

もちろん、このようなことは、考え得るにしても来迎院本の祖本以前の段階において初めて認め得ることと言えよう。それ故、確証を得ることは難しいが、一つ興味深いのは、右の推定に当ってたまたま思いついた一行の字数(二十二字)、それとほぼ同じ字数(二十一字)の脱文がこの序の末尾に見えることであり、いま一つの参考になるのではないかと思う。即ち、これも牽強付会に過ぎるかもしれぬが、ひょっとして、来迎院本の祖本は或る段階で他の『霊異記』古写本と同様、一行二十一、二字で書かれていた、ということは考えられないであろうか。そうとすれば、錯簡・脱文の契機が、共通して素直に理解されるのであるが。なにぶん、思いつきによるものだけに、筆者としても確信は持てないが、ひとまず諸賢の御叱正を乞う次第である。

下巻序は、右の難解箇所以外にもいろいろと興味深い問題を含み、これについても触れるべきであるが、今回は紙幅の関係から、それだけの余裕が無い。まことに残念であるが、新たな訓読を行なった根拠の一々とともに、一切、次の機会にゆずることとしたい。次回には、例えば「モラフ」の問題(9)など、特に諸本の仮名傍訓・訓釈・訓注をめぐって、これまでにあまり触れられていない事実につき、考えてみたいと思う。御教えを乞う。

【注】

(六五頁に続く)